

# 国崎望久太郎論

——『近代短歌史』と歌集『秋雪』を中心にして——

安 森 敏 隆

## 序

坂道をのぼり来たりて月読の光あまねきに打たれ立つかも

(望久太郎)

国崎望久太郎は学問研究において、古代と現代、現代と古代を結びつけるという壮大な研究をされていたが、この歌の中にみごとにそれが具現されている。京都一乗寺にある圓光寺を包むような穏やかな凌巖山から出てくる月は、まさに月読の尊(天照大神の弟)と思われる巖かな光を圓光寺の庭にふりそそいでいる。

歌集『秋雪』にちなんで、毎年十一月三日の「文化の日」に

「秋雪忌」がおこなわれる。二〇〇一年には、圓光寺に、冒頭の一首を刻んだ歌碑が建立され、除幕式が行われた。

圓光寺は、宮本武蔵が吉岡一党と決闘をした一乗寺下り松から近いところにある古刹である。南には詩仙堂そして北には曼殊院とまさに浮き世を離れた風雅の地にある。そして、国崎望久太郎の家もその近くに、今もある。

ふるさととはかへつて今は一乗寺馬場町六番地にして曼殊院前

紅葉の頃には、ライトアップされる圓光寺の池の畔を通り、裏山に向かって上っていくと東山三十六峰の一つ凌巖山がまるで水墨画のようにこんもりと現れる。北側の小高いところには

徳川家康の墓があり、一帯が圓光寺のこぢんまりとした静かな墓地となっている。振り返れば京都の町並みが一望の下に見渡せるなんとも絶景のところ、国崎家のお墓が立てられている。そして、その側に、冒頭の一首を刻んだ歌碑が建立されたのである。

作者である国崎望久太郎が、この圓光寺の裏山の坂道を上ってきたとき、視界は一変してまさに満月が凌巖山の上に出ていて心打たれた様子が、その場所に立つと美しくも目に見えるように浮かんでくる。五月には、エゴの木の花びらが吹雪くのもまた美しい眺めであるし、また、ライトアップされる霜月の満月の夜は格別である。

一

学者であり、歌人であり、そして古代から現代まで見通せる短歌史家であった国崎望久太郎（くにさき・もくとろう）は、福岡県大和村に生まれ、旧制第七高等学校を経て、東洋大学文学部国文学科卒。一九二九（昭和四年）年「ポトナム」入会。同誌選者となる。一九三六年、立命館大学法文学部講師、一九四六年より教授。『日本文学の古典的構造』（昭和33年2月 法律

文化社）、『啄木論序説』（昭和45年5月 同前）等、多数の著書がある。歌集に『秋雪』（昭和61年12月 短歌新聞社）がある。国崎望久太郎には、いろんな仕事があるが、「ポトナム」創始者で立命館大学文学部の教授であった小泉三三の仕事を引き継いだものとして、『近代短歌史研究』（立命館出版 昭和35年3月）がある。この本こそ、小泉三三の提起した短歌の主張である「現実的新抒情主義」の考え方を継承し論としてさらに展開し、遠望したものである。

近代短歌史の専門的な研究は、斎藤茂吉の『明治大正短歌史概観』あたりから軌道にのりはじめた。しかもっとも精緻な文献的基礎的調査は、小泉三三博士の膨大な『明治大正短歌資料大成』三巻によって、一応整備されたといつてよいのではなからうか。（中略）さる昭和三十一年晩秋、先生は突然逝去された。私は先生の心情を追懐するの情に堪えず、古い小論文まで集めて本書をあんた。つつしんで靈前にささげささやかな記念にしたいと思う。まことに果敢ないことである。昭和三十四年秋

〔近代短歌史研究〕「序」

師である小泉冬三の昭和三十一年の晩秋の死に当面し、急遽それまでの論文を一本にまとめたものが『近代短歌史研究』というわけである。この本の構成は、次のようになっている。

- 一 近代短歌史の輪郭（昭和34年7月）
- 二 近代歌論の成立（昭和29年9月）
- 三 子規論をめぐる二三の問題（昭和31年1月）
- 四 子規における万葉主義の親展（昭和31年5月）
- 五 近代における歌道観念（昭和21年2月）
- 六 島木赤彦（昭和10年8月）
- 七 小泉千樫の生涯と芸術（昭和9年8月）
- 八 若山牧水と自然主義退唐期（昭和13年6月）
- 九 落伍者の文学——啄木論への一視点（昭和32年1月）
- 十 『赤光』編纂についての疑問（昭和33年2月）

以上の構成と成立時期を見て解することは、一卷の論考が昭和九年から昭和三十四年の長期に渡って書かれたことと、歌人研究と短歌史研究の二つに分断されたように見えるところにある。しかし、よく読んでみると、ここで展開される論理の一貫性と

本質性において、これらのことがみごとにアマルガムされて近代短歌の本質をめぐりに剔抉していることが解る。

この本の特徴は、日本の短歌がどのようにして自然主義文学の流れを潜り抜けることが出来たかという一点に焦点をあわされているところにある。

自然主義文学と言えば日本の明治四十年前後から受容されてきた思潮であるが、その自然主義を日本の短歌がどのように受容し潜り抜けたかというところにポイントを置かれて書かれている。

この一本のモチーフを簡略化して言えば、「明星」系のロマンティズムも、「アララギ」系のリアリズムも結局は、西欧からきた自然主義文学運動の現実と市民的自我を真に獲得することはできなかった、と言うことになる。それでは、誰が日本においてそれを真に潜り抜けたか、ということになるのである。そこに向かって、国崎望久太郎の論点は焦点を合わせていくのである。

反封建闘争の通過を通じて新しい近代が生産されなかったことが、日本近代化乃至はその歴史進歩的展開に課した計り

知れない困難については既にしばしば指摘されている。文学の面においても、たとえば、二葉亭四迷などがいち早く近代文学の方法を、ロシア文学より継受し移植した事例なども、真の先駆者と云えるかどうか。近代文学の方法と観念がわが国に始めて見られたという限りにおいては先駆者ではあった。しかしそれは封建的文学の方法と観念との悪戦苦闘の体験の中から形成されたものではない。したがってその先駆性は実は非封建的ということであった。二葉亭にしる鷗外にしる彼らの文学の近代性は反封建的な文学論争を経由していない弱点を含んでいる。これは自然主義の文学運動の展開する時期を待たねばならなかった歴史的制約であった。彼等の非封建的文学観念では明治絶対主義政府の上からの近代化政策を文学の分野において反映していると評せざるを得ない側面をもっている。

(国崎望久太郎「近代歌論の成立」(三))

国崎望久太郎の論理は、単に「近代短歌」の歴史のみをみるのではなく、通時的に日本の歴史を望観し、さらに共時的に日本の近代を見据えることによって一つの論理の核(コア)がつけられていくところにあった。そして研究者である自己の主観

をまず前面に据えるのであるが、その主観を支えている歴史的必然としての客観性をもあわせて一つの論考をつくり上げていくところにある。

ここでは、二葉亭四迷も森鷗外も、自己の置かれていた日本という〈場〉や伝統的な〈場〉への主体的な戦いの欠如としてしか文学論を形成できなかった弱みが追求され、それがひいては日本の近代小説の、自然主義的リアリズムの偏狭へとながっていったことが論じられていくのである。そういう意味では、日本の自然主義文学も真の文学として花開かず、〈私小説〉という偏狭なところに行ってしまったのである。そうしたなかで、国崎望久太郎は、この期の「石川啄木」に注目するのである。そして、そこで展開される啄木論の特徴と本質は、啄木はつねに時代に対して遅れてきた、という考え方を全面に押し出したところにある。

石川啄木は、明治二十年代において明星派の歌人として誕生するが、しかしここにも遅れてきた。すなわち、「明星」のピークのところで、浪漫主義の歌人としても乗り遅れ、続いて啄木は自然主義文学に向いて動きですが、ここでも自然主義文学にも乗り遅れ、さらに明治の四十年代のアナキズム運動にも傾

倒していくが、これにも乗り遅れ、最後は実存主義者として生きた、とするのが国崎望久太郎の考え方である。

そのところが、真の自然主義文学とぶつかるところで、人間の赤裸々な自己をぶち込めることができるかどうかと、いうことになる。そして国崎望久太郎の啄木論の骨子は石川啄木を「落伍者の文学」として位置付けるところにあったのである。

文学者のさまざまの型のうちに、われわれは一つの顕著な日本の特性として落伍者の文学の系譜を描定することができ、それが日本の民族の文学心をつよくひきつける理由は、まだ十分に説明されていないが、伝統的に強力なもので、われわれが文学を受容する際の心理的傾斜として前提されていることは事実である。

落伍者とは、もちろん実生活上のつらい緊張を必要とする戦線からの脱落者である。時代よってその戦斗からの離脱の様相も多様であるが、実生活に敗北した点は共通している。もちろん多くの人々が実生活の上で経験する一般の落伍はここでは問題にならない。そういう落伍者にしてなお文学活動を継続した人々だけを対象にするわけであるが、こうした人々

の実生活とその文学的創造的活動とは、内面的に深く結び合っているし、文学の本質を考察する場合にも非常に大事な契機をふくんでいるように思われる。われわれは落伍者の文学の系譜に、もう少し注意をはらう必要がある。

#### 〔落伍者の文学―啄木論の一視点〕

国崎望久太郎の「落伍者の啄木」の視点は、従来の天才詩人啄木や革命詩人啄木の像に真正面から倒立し、従来の啄木像のオポチュニズムを指摘し、再び啄木を地上において蘇生させなければならぬことを示唆した点においてまことにラジカルなものであった。そして、この考え方こそ「ポトナム」の「現実的新抒情主義」の考え方に通底していたのである。

このように、近代短歌論を、自然主義文学に焦点を当て、さらには石川啄木に焦点を当てて読み直そうとした国崎望久太郎の実作である短歌は、どのような位相にあったのが、本稿のもう一つの目的である。それを実作である歌集『秋雪』を読むことよって位置づけてみたい。

二

国崎望久太郎には、先程も述べたように、『日本文学の古典的構造』『啄木論序説』はじめ『風雅方寸』『詩歌と環境』と著書はたくさんあるが、歌集は一冊もなかった。そこで、喜寿の祝いにあわせて一本を出そうと云うことになり、国崎望久太郎を囲んでつくっていた研究会「枯野」の仲間が中心になって、歌を集めることになった。

灯火親しむ候、ご清栄と存じます。

さて、国崎望久太郎氏は、来春、めでたく喜寿を迎えられます。氏の学問的業績は逐次刊行され、既に高い評価を得ていることは、私どものよく知るところですが、氏は一方で、歌人として、学生時代から活躍されました。歌誌「ポトナム」に所属、敗戦直後には歌誌「楼蘭」を自ら編集するなど、学問に並行して、あるいは、学問の源泉として、氏には短歌がありました。ところが、氏の歌集は未刊であり、これはなんとも残念であります。このたび、氏の喜寿をことほぎ、知人弟子相集い、氏の半生に渡る歌業を

『秋雪』一巻として刊行したく存じます。そのために左記の刊行会を設けたく、ご参加いただけると幸いです。なお、お知り合いの方々にも参加をお勧めください。

1986年仲秋

これは、そのときの呼びかけ文である。そして出版記念会は昭和六十一年十二月七日（日）午後五時～七時「新都ホテル」で行われた。

歌集『秋雪』は、昭和三年の歌から、昭和六十一年までの一三九首の歌が逐年順に構成されている。冒頭の一首は次のものである。

日を一日南にむかひ走りたるわが目に青し鹿兒島の海

この歌については、七高時代の同級生である森邦隆が

昭和三年の秋だったと思う、七高造士館の文芸雑誌『啓明』に掲載された望久太郎君の歌の中の一首である（『秋雪』葉）

と言ひ、現存する最初の歌であることがわかる。鹿児島七高受験時に南下されたときの歌である。初期の歌は、故郷でもある南の九州を志向した歌が多い。

ボンタンは人とひそかに逢ふ丘の真日てるなかに輝きにけり  
賜ひたるボンタンの香をなつかしみ試験勉強に夜はふかさむ

そうした歌の中に、国崎望久太郎の詩質である歌人としての豊かな感性と鋭い洞察や観察からなる秀歌が量産されている。

魚類いさぐらのまなこ開きてひそまれる海底そこの悲しみ水に手触るる

海の鳥大きくめぐりその白き翼光れりわれは死なぬに

うつし世の鳥獸魚介も死ぬならむほのぼのとして死にて行  
くらむ

揺らぎなびく海藻の光る時おのが身の澄透りつつ巻かれな  
ばよし

昭和八年にはいって、この年の一月号に小泉冬三（実はこの論文の執筆者は国崎望久太郎）の「現実的新抒情主義の提唱」

が掲載された。ポトナムの主張ともなった「現実的新抒情主義」とは、その後、それを推進していった和田周三の言葉を借りて言うとう、次のような主張であったことがわかる。

「現実的新抒情主義」には三つの基本的な命題がある。一つは「現実」とは何かということ。二つには、表現の対象は「現実感」であるということ。三つには、表現の方法として「象徴」がとられねばならないということ。

第一の「現実」の定義は、時代を動かし、われわれの生活を左右する歴史的社会的な力であるとされている。当時（昭和八年）の社会的不安と混乱が、そこに述べられているが、これらの社会的現象を作り出す根元的な力は、「帝国主義時代に入つた資本主義の持つ」物であり「世界恐慌の中の一環」をなすものとしてゐる。このような現実こそは、われわれの生命をも左右する凶暴な力そのものである。この現実との対決の場においてこそ、われわれの生活意志は眞実をはらみ、具体性をもつことができるのである。われわれの言う現実とは、決して日常茶飯の雑事や世相、風俗的な皮相な現象を意味するものではない。これは今日までに常識となつてゐるこ

とかもされないが、なお確認する必要が全くないと言うわけではない。

第二の命題は、「現実」を歌うのではなく「現実感」を歌おうとするものである。短歌は「現実」そのものを、あるいは現実への理解を歌うものではない。その現実との対決の場に生じるわれわれの感情を歌うのである。「いつはらない現実感を生々と抒情することは、短歌の基本的な原則的格律である」と言い、「我々の現実感を、いかに生々と抒情するかと言ふ、あの素朴なしかし基本的な原則」とも言う。我々が今日の現実を知識的に理解することも決して容易なことではないが、それを理解したとしても、その理解したところを述べるのは文学の仕事ではない。この理解をもちながら、生活の面に生起するさまざまな現象を活発にとらえて、そこに感慨をもち、情感をもつ。その情緒、息吹き、生命の揺らぎは生活の面に生起するものでなければならぬ。したがって誠実なる生活者は、逆にその生活を通じて、やがて今日の現実の真実をつかみうる可能性をもつ。ようするに短歌は生活の中で歌われねばならない。

ところで、歌われるものは、これらの生活の場に生起する

感慨であるが、題材としては何を取り上げられるべきか。それが第三の命題である。

第三の命題は、表現方法としての「象徴」である。(中略)短歌という微小な一詩形に我々の肉体の陰影を余すところなく投射すること、我々の持つ過去の本質が、短い詩形に凝集されること、一首一首以前のすべてを注ぎこむこと、これらすべて、われわれの生活おける時間的空間的な全体を表現しようとすることを念願としていることばである。一首の歌に、全体を歌いこもうとすることは、とりもなおさず象徴の方法である。象徴とは一つをもって全体を表現するものである。

(『現代の構想』昭和56年12月)

この「現実とは何か」、「表現の対象は現実感」、「象徴」の三つの命題こそ、ポトナムの「現実的新抒情主義」の骨子であった。

國崎望久太郎も、この「現実的新抒情主義」の主張に基づき「ポトナム」に次のような作品を当時、載せているのが注目される。



古代のかしこき学者等星みつつ犬さそり獅子などを連想し  
けむか

満州戦争の兵のせ夜行車轟進せり駅前にはほそほそ物を商ふ  
近代人のデカダンスここに極まれるときこころ厳しくかへ  
りみるべき

プロレタリアの徒きほひもの言へど現身は娑婆苦にあへぎ  
生きむとしもなき

芥川龍之介氏を思ふとき自殺かならずや不自然ならず

さらに、昭和十年代にはいって、日中戦争と共に次のような  
作品が作られてゆく。

かがまりて我は見にけり現つともなしとかな蟻の列なして  
行く

軍隊の動ける平野に落しゆく飛行機の影を思ひ居たりし

〔桔梗の花 三首〕

あかつきの暴風雨ををかし編隊の爆撃機とびぬとぞあはれ  
枯梗

暁に空襲されし支那軍は散り乱りつつほろびたりちふ

そうした中で、吾子の生誕や妻との生活や自然への命そのも  
のへの慈しみをうたわれているのが注目される。

生まれたる生命いつくしく声あげぬこころ恋ほしくよりど  
なきなり（長女2首）

生命わけて妻の眠りの深くあれどもならば居て遠きとほき  
雪風

急行列車は小駅捨てぬ海よりの台風はいよよすこくなりた  
り

面影に妻たちきたりすぐ消えぬ硝子窓をうちて雨降りつ  
る

風筋の時折暑き屋上に兵送る列を瞰るいたむがごとし

炎方に軍歌叫びて征きたりし兵をあはあはと夜半に浮べぬ

昭和十年代、斎藤茂吉をして、戦争詠へとかりたせた第二  
次世界大戦の戦争詠が、こういうかたちでうたわれている。

岡本彦一はこれらの歌の背景について「氏には応召・即日帰  
郷という出来事があった」とし、つづいて国崎氏の戦争観につ  
いて、

氏が、大陸における戦況について、きわめてよく知っていたことである。小生などはこの方面の事には無関心でいられないものの詳細に戦闘の状況を逐次おっていくということはしなかった。氏の知識について一体これはどういうことかと疑問をもったものである。

〔秋雪〕葉

と言っているのが注目される。

神々を喚ばはんとする心あり暁暗に額伏し居れば

露霜をふみゆきしかばヒトラが滅共を決意せし六月二十

二日を思ひぬ

戦にたつべききはにたざるは国を危くすすめらみくにを  
あなさやけすめらみことの大勅宣りませしかばこそぞり戦ふ  
みいくさは轟沈戦におごるなくさやけくぞ向ふ北のわだつ  
み

おほきみのみことのまにま死ねと言ふ手紙書き終りたりわ  
が弟に

戦死者の御霊祭らふ白砂の庭に翳りつつゆける雲あり

わだつみに漂ひにつつ君が代をうたひみまかりぬかかる戦闘

「ポトナム」の主張である「現実的新抒情主義」の「現実とは何か」、「表現の対象は現実感」、「象徴」の三つの命題が、これらの歌のなかで、「いのち」の歌として咀嚼され、戦争を透視してうたおうと志向しているのである。

昭和三十年代、学生運動の激しくなっていく京都の立命館大学にあって、次のように学生達や当時の状況を詠んでいる。

学生委員との長き長き会議に疲れたり神よひとりの我に帰  
らしめ給へ

「やむを得ず」との答弁をさき軽蔑の大き表情をかくすと

もせず

学生諸君の要求はまこともつともにてその抽象性こそよろ  
し

淡々となりし性欲とことごとくに腹立つことと如何に關はる  
校長を拒否し続けて勝ちたるを告げくるふみのつつましく

てよし

デモ隊を監視するとき位置におく可愛ゆきわれの学生が

みゆ

一九六〇年の安保闘争の時の歌である。当時、立命館大学には、学生歌人の黒住嘉輝や清原日出夫がおり、一方、歌壇に目を向けると前衛短歌の塚本邦雄や寺山修司や岡井隆がいた。

平和行進の静かなる歩幅揃ひつつ怒れども黙すわれらの一  
団

赤旗をちぎれむばかりに振る声すそこに寄り行きて得たる  
平安

学生の激する声の響きつつ櫂の青葉を削ぎて風立つ  
赤旗をわれはふらねど若きらがふるはよしと思ふ怒れと思

ふ

こうした日々においても、誠に良く、自己を客観視し対象化した歌がある。

顛頂薄き国崎教授真下の校庭をよぎり出で行きにけり

国崎望久太郎にとって、最も充実し、それでいて苦しい学生運動の試練に見回れた時代であったことが、この後直ぐ、同僚

の林家辰三郎、奈良本辰也、梅原猛などの先生が学園を去ったことから容易に伺い知ることが出来る。

六十五歳の任期を全うされ、その後数年、特認教授をされ立命館大学を退職してから、兵庫県にある園田学園女子大学に赴任し、図書館長の要職を兼務しながら教授生活を送り始める。

うしろよりもくたらう先生と呼ぶ子ありまさしく我を呼び  
し声かも

われの名をかく呼ぶ子等の学びある学園にしていとしきも  
のを

安部公房のこと語りつつ塚口の駅までの道遠くはあらず  
けやき道緑さやけけく風立ちぬ心涼しく学び行くべし

こうした日々において、次のような孫や子の歌が散見して心  
慰められる。

子と孫を率て遊びつつ座りをり防波堤の下のテトラポット

結

故里にうとまれてきし白秋の帰去来の詩碑に水照り寒しも  
詩碑の前にゲートボールに遊びゐる翁媪の顔に見覚えはなし

この二首がふくまれている「沖端村」五首を読むとき、北原  
白秋に国崎望久太郎が重なっていることが容易に解る。「沖端  
村」は、白秋出生の地である「福岡県山門郡沖端村大字沖端石  
場（現柳川市沖端村）」のことである。

立命館大学を退職し、園田学園女子大学で教鞭をとっていた  
国崎望久太郎は、昭和六十一年、ひさしく九州におもむき白秋  
の「帰去来」の詩碑をたずねた。

山門は我が産土、

雲騰る南風のまほら、

飛ばまし、

今一度

と刻まれた産土の神の前でゲートボールに興じる翁媪の顔を見

ながら、だが、だれ一人として見覚えのある顔に出会わなかつたことに、一抹の寂しさを覚えたのである。

と同時に、「故里にうとまれてきし白秋」の〈かなしび〉を自己の〈かなしび〉とかさねながら思われたのである。国崎望久太郎は、白秋と同じ「福岡県山門郡」の大和村の母の実家で誕生したのである。